



Cisco TrustSec の概要

Cisco TrustSec は、信頼できるネットワークデバイスのドメインを確立することによってセキュアネットワークを構築します。ドメイン内の各デバイスは、そのピアによって認証されます。ドメイン内のデバイス間リンクでの通信は、暗号化、メッセージ整合性検査、データパスリブレイ防止メカニズムを組み合わせたセキュリティで保護されます。

- [Cisco TrustSec の制約事項 \(1 ページ\)](#)
- [Cisco TrustSec のアーキテクチャに関する情報 \(2 ページ\)](#)
- [セキュリティ グループ ベースのアクセス コントロール \(4 ページ\)](#)
- [許可とポリシーの取得 \(11 ページ\)](#)
- [環境データのダウンロード \(12 ページ\)](#)
- [RADIUS リレー機能 \(12 ページ\)](#)
- [リンク セキュリティ \(13 ページ\)](#)
- [SXP によるレガシー アクセス ネットワークへの SGT の伝播 \(15 ページ\)](#)
- [非 TrustSec 領域のスパンニングのためのレイヤ 3 SGT トランスポート \(17 ページ\)](#)
- [VRF-Aware SXP \(18 ページ\)](#)
- [Cisco TrustSec の機能履歴の概要 \(19 ページ\)](#)

Cisco TrustSec の制約事項

- 無効なデバイス ID が指定された場合、Protected Access Credential (PAC) のプロビジョニングが失敗し、ハング状態のままになります。PAC をクリアし、正しいデバイス ID とパスワードを設定した後でも、PAC は失敗します。

回避策として、Cisco Identity Services Engine (ISE) で、PAC が機能するように、
[Administration] > [System] > [Settings] > [Protocols] > [Radius] メニューの [Suppress Anomalous Clients] オプションをオフにします。

- FIPS モードで Cisco TrustSec はサポートされていません。

Cisco TrustSec のアーキテクチャに関する情報

Cisco TrustSec のセキュリティアーキテクチャは、信頼できるネットワーク デバイスのドメインを確立することによってセキュアネットワークを構築します。ドメイン内の各デバイスは、そのピアによって認証されます。ドメイン内のデバイス間リンクでの通信は、暗号化、メッセージ整合性検査、データパブリック防止メカニズムを組み合わせたセキュリティで保護されます。Cisco TrustSec は、ネットワークに入るようにセキュリティグループ (SG) がパケットを分類するために認証中に取得したデバイスおよびユーザークレデンシャルを使用します。このパケット分類は、Cisco TrustSec ネットワークへの入力時にパケットにタグ付けされることにより維持されます。タグによってパケットはデータパス全体を通じて正しく識別され、セキュリティおよびその他のポリシー基準が適用されます。このタグはセキュリティグループタグ (SGT) と呼ばれ、エンドポイント デバイスはこの SGT に基づいてトラフィックをフィルタリングできるので、ネットワークへのアクセス コントロール ポリシーの適用が可能になります。



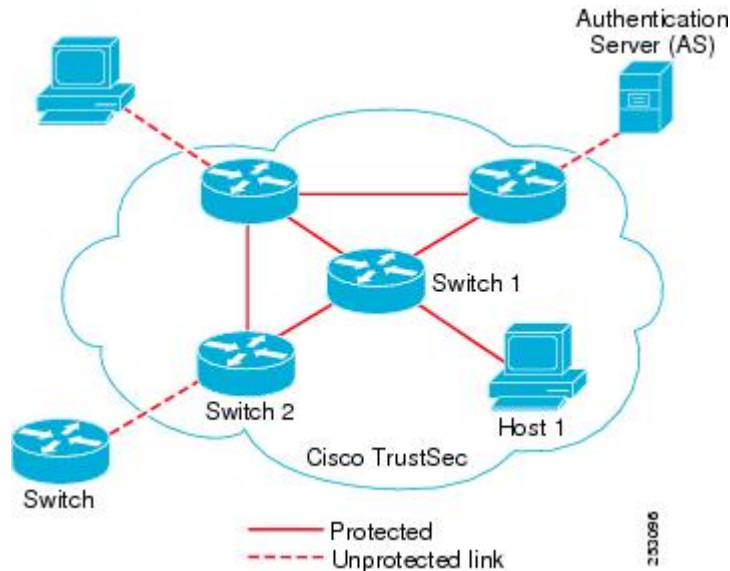
- (注) Cisco TrustSec IEEE 802.1X リンクは、Cisco IOS XE Denali、Cisco IOS XE Everest、および Cisco IOS XE Fuji リリースでサポートされているプラットフォームではサポートされていないため、オーセンティケータのみがサポートされます。サブリカントはサポートされていません。

Cisco TrustSec のアーキテクチャは、3 種類の主要コンポーネントで構成されています。

- 認証されたネットワーキング インフラストラクチャ : Cisco TrustSec ドメインを開始するために最初のデバイス (シードデバイス) が認証サーバーで認証した後に、ドメインに追加された新しい各デバイスはドメイン内のピアデバイスにより認証されます。ピアは、ドメインの認証サーバーに対する媒介として動作します。それぞれの新たに認証されたデバイスは認証サーバーによって分類され、アイデンティティ、ロールおよびセキュリティポリシーに基づいてセキュリティグループ番号が割り当てられます。
- セキュリティグループベースのアクセスコントロール : Cisco TrustSec ドメイン内のアクセスポリシーは、トポロジとは無関係で、ネットワークアドレスではなく送信元デバイスおよび宛先デバイスのロール (セキュリティグループ番号で指定) に基づいています。個々のパケットには、送信元のセキュリティグループ番号のタグが付けられます。
- セキュアな通信 : 暗号化対応ハードウェアでは、暗号化、メッセージ整合性検査、データパブリック保護メカニズムの組み合わせを使用してドメイン内のデバイス間の各リンクの通信を保護できます。

次の図に、Cisco TrustSec ドメインの例を示します。この例では、Cisco TrustSec ドメイン内に、ネットワーク接続されたデバイスが数台とエンドポイント装置が 1 台あります。エンドポイント装置 1 台とネットワーク接続デバイス 1 台がドメインの外部にあるのは、これらが Cisco TrustSec 対応デバイスでないか、またはアクセスを拒否されたためです。認証サーバーは、Cisco TrustSec ドメインの外部にあると見なされます。これは、Cisco Identities Service Engine (Cisco ISE)、または Cisco Secure Access Control System (Cisco ACS) です。

図 1: Cisco TrustSec ネットワーク ドメインの例



Cisco TrustSec 認証プロセスの各参加者は、次のいずれかの役割を果たします。

- サプリカント：Cisco TrustSec ドメインへの参加を試行している、Cisco TrustSec ドメイン内のピアに接続されている認証されないデバイス。
- 認証サーバー：サプリカントのアイデンティティを確認し、Cisco TrustSec ドメイン内のサービスへのサプリカントのアクセスを決定するポリシーを発行します。
- オーセンティケータ：すでにCisco TrustSec ドメインの一部であり、認証サーバーに代わって新しいピアサプリカントを認証できる認証済みデバイス。

サプリカントとオーセンティケータの間のリンクの初回の確立時には、通常は次の一連のイベントが発生します。

1. 認証 (802.1X)：サプリカントは認証サーバーによって認証され、オーセンティケータが仲介として機能します。相互認証は、2つのピア（サプリカントとオーセンティケータ）間で実行されます。
2. 認可：サプリカントのアイデンティティ情報に基づいて、認証サーバーは、リンクされた各ピアにセキュリティグループの割り当てやACLなどの認可ポリシーを提供します。認証サーバーは各ピアのアイデンティティを相互に提供し、各ピアはリンクに適切なポリシーを適用します。
3. セキュリティアソシエーションプロトコル (SAP) ネゴシエーション：リンクの両側で暗号化がサポートされている場合、サプリカントとオーセンティケータはセキュリティアソシエーション (SA) を確立するために必要なパラメータをネゴシエートします。



- (注) SAP は 100G インターフェイスではサポートされていません。100G インターフェイスでは、MACsec Key Agreement Protocol (MKA) と Extended Packet Numbering (XPN) を使用することを推奨します。

3つのステップがすべて完了すると、オーセンティケータはリンクの状態を無許可（ブロック）状態から許可状態に変更し、サブリカントは Cisco TrustSec ドメインのメンバになります。

Cisco TrustSec では、入力タギングと出力フィルタリングを使用して、スケーラブルな方法でアクセスコントロールポリシーを適用します。ドメインに入るパケットは、送信元デバイスに割り当てられたセキュリティグループ番号を含むセキュリティグループタグ（SGT）でタグ付けされます。このパケット分類は、Cisco TrustSec ドメイン内のデータパスに沿ってセキュリティ、およびその他のポリシーの基準を適用するために維持されます。データパスの最後の Cisco TrustSec デバイス（エンドポイントまたはネットワークの出力ポイント）は、Cisco TrustSec 送信元デバイスのセキュリティグループおよび最終の Cisco TrustSec デバイスのセキュリティグループに基づいてアクセスコントロールポリシーを適用します。ネットワークアドレスに基づいた以前のアクセスコントロールリストとは異なり、Cisco TrustSec アクセスコントロールポリシーは、セキュリティグループアクセスコントロールリスト（SGACL）と呼ばれるロールベースアクセスコントロールリスト（RBACL）形式です。



- (注) 入力とは、宛先へのパス上のパケットが最初の Cisco TrustSec 対応デバイスに入るパケットを指します。出力とは、パス上の最後の Cisco TrustSec 対応デバイスを出るパケットを指します。

セキュリティグループベースのアクセスコントロール

このセクションでは、セキュリティグループベースのアクセスコントロールリスト（SGACL）について説明します。

セキュリティグループおよび SGT

セキュリティグループは、アクセスコントロールポリシーを共有するユーザー、エンドポイントデバイス、およびリソースのグループです。セキュリティグループは Cisco ISE または Cisco Secure ACS の管理者が定義します。新しいユーザーおよびデバイスが Cisco TrustSec ドメインに追加されると、認証サーバーは、適切なセキュリティグループにこれらの新しいエンティティを割り当てます。Cisco TrustSec は各セキュリティグループに一意的な 16 ビットのセキュリティグループ番号を割り当てます。番号の範囲は Cisco TrustSec ドメイン内でグローバルです。デバイス内のセキュリティグループの数は認証済みのネットワークエンティティの数に制限されます。セキュリティグループ番号を手動で設定する必要はありません。

デバイスが認証されると、Cisco TrustSecはそのデバイスから発信されるすべてのパケットに、デバイスのセキュリティグループ番号が含まれているセキュリティグループタグ (SGT) をタグ付けします。タグ付けされたパケットはネットワークを通じて Cisco TrustSec ヘッダーで SGT を運びます。SGT は全社内の送信元の許可を特定する単一ラベルです。

SGT には、送信元のセキュリティグループが含まれているため、タグは送信元 SGT と呼ばれることもあります。宛先デバイスもまたセキュリティグループ (宛先 SG) に割り当てられるため、便宜上、このセキュリティグループを接続先グループタグ (DGT) と呼ぶこともあります。ただし、実際の Cisco TrustSec パケットタグには、宛先デバイスのセキュリティグループ番号は含まれていません。

セキュリティグループ ACL のサポート

セキュリティグループアクセスコントロールリスト (SGACL) はポリシーの適用です。これによって管理者は、セキュリティグループの割り当てと宛先リソースに基づいてユーザーが実行する操作を制御できます。Cisco TrustSec ドメイン内のポリシーの適用は、軸の 1 つが送信元セキュリティグループ番号、もう 1 つの軸が宛先セキュリティグループ番号である、アクセス許可マトリックスで表示されます。マトリックス内の各セルには、SGACL の番号付きリストが含まれます。ここでは、送信元セキュリティグループに属し宛先セキュリティグループに属する宛先 IP を持つ、IP から送信されるパケットに適用される必要があるアクセス権限を指定します。

SGACL は、IP アドレスではなく、セキュリティアソシエーションまたはセキュリティグループタグ値に基づいたステートレスのアクセス制御メカニズムを提供し、フィルタリングします。SGACL ポリシーをプロビジョニングするには、次の 3 つの方法があります。

- **スタティック ポリシープロビジョニング** : **cts role-based permission** コマンドを使用して、ユーザーが SGACL ポリシーを定義します。
- **ダイナミック ポリシープロビジョニング** : SGACL ポリシーの設定は、Cisco Secure ACS または Cisco Identity Services Engine の主にポリシー管理機能によって実行する必要があります。
- **認可変更 (CoA)** : 更新されたポリシーは、SGACL ポリシーが ISE で変更され、CoA が Cisco TrustSec デバイスにプッシュされるとダウンロードされます。

デバイスデータプレーンは、ポリシープロバイダー (ISE) から CoA パケットを受信し、CoA パケットにポリシーを適用します。その後、パケットはデバイスコントロールプレーンに転送され、着信 CoA パケットに対して次のレベルのポリシーが適用されます。ハードウェアとソフトウェアのポリシーカウンタのヒット情報を表示するには、特権 EXEC モードで **show cts role-based counters** コマンドを実行します。

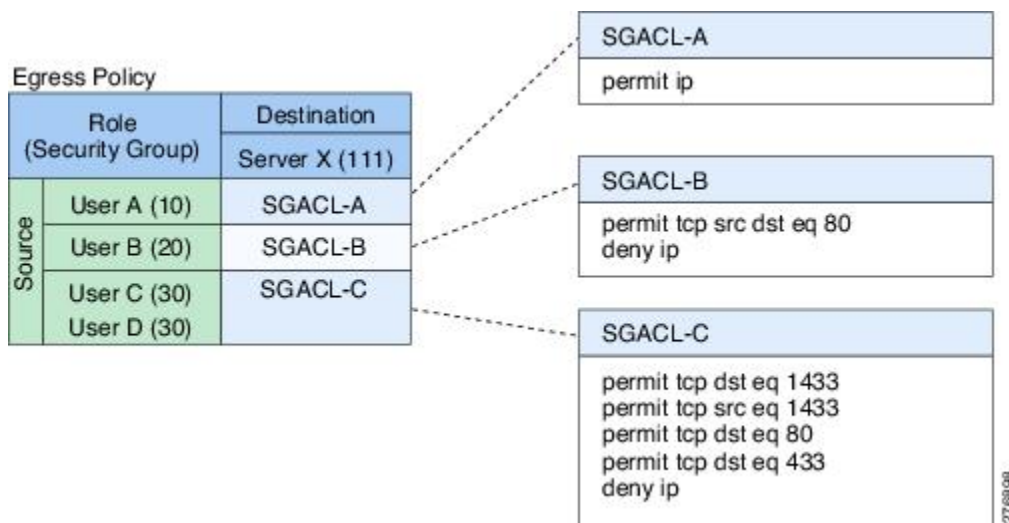
SGACL ポリシー

セキュリティグループアクセスコントロールリスト (SGACL) を使用して、ユーザーと宛先リソースのセキュリティグループの割り当てに基づいて、ユーザーが実行できる操作を制御できます。Cisco TrustSec ドメイン内のポリシーの適用は、軸の 1 つが送信元セキュリティグ

ループ番号、もう1つの軸が宛先セキュリティグループ番号である、許可マトリックスで表示されます。マトリックスの本体の各セルには送信元セキュリティグループから宛先セキュリティグループ宛てに送信されるパケットに適用される必要がある許可を指定する SGACL の順序リストを含めることができます。

次の図に、3つの定義済みのユーザーロールと1つの定義済み宛先リソースを含むシンプルなドメインの Cisco TrustSec 許可マトリックスの例を示します。ユーザーの役割に基づいて宛先サーバーへのアクセスを3つの SGACL ポリシーで制御します。

図 2: SGACL ポリシー マトリックスの例



ネットワーク内のユーザーとデバイスをセキュリティグループに割り当て、セキュリティグループ間でアクセス制御を適用することにより、Cisco TrustSecはネットワーク内でロールベースのトポロジに依存しないアクセス制御を実現します。SGACLは従来のACLとは異なり、IPアドレスではなくデバイスアイデンティティに基づいてアクセスコントロールポリシーを定義するため、ネットワークデバイスはネットワーク全体を移動し、IPアドレスを変更することができます。ロールと許可が同じであれば、ネットワークトポロジが変更されてもセキュリティポリシーには影響しません。ユーザーがデバイスに追加されたら、適切なセキュリティグループにユーザーを割り当てるだけで、ユーザーはただちにそのグループの許可を受信します。



(注) SGACLポリシーは、デバイスからエンドホストデバイスに生成されるトラフィックではなく、2つのホストデバイス間で生成されるトラフィックに適用されます。

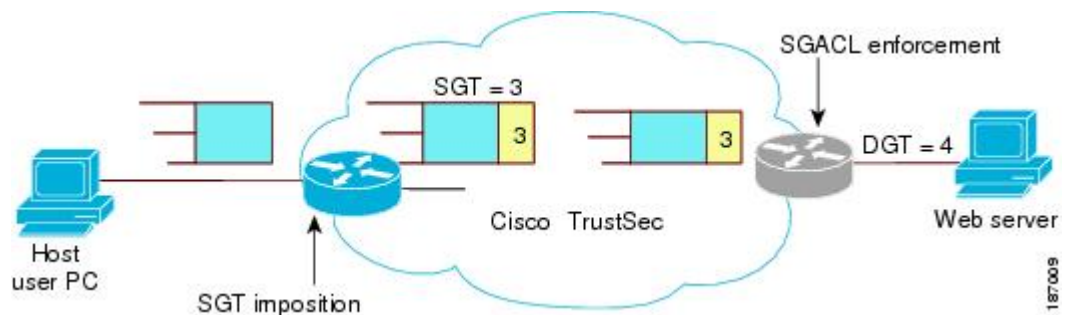
ロールベースの許可を使用すると ACL のサイズが大幅に節約され、メンテナンス作業も簡単になります。Cisco TrustSecによって、設定されているアクセスコントロールエントリ (ACE) の数は、指定されている許可の数によって決定されるため、ACE の数は従来の IP ネットワークでよりもずっと小さくなります。Cisco TrustSec での SGACL の使用は、従来の ACL と比較して TCAM リソースをより効率的に使用します。では、最大 1,408 の SGACL ポリシーがサポートされます。

入カタギングおよび出力の強制

Cisco TrustSec アクセスコントロールは、入カタギングと出力の適用を使用して実装されます。Cisco TrustSec ドメインの入力点では、送信元からのトラフィックは、送信元エンティティのセキュリティグループ番号を含む SGT でタグ付けされます。SGT は、ドメイン全体にわたってトラフィックと合わせて伝播されます。Cisco TrustSec ドメインの出力ポイントで、出力デバイスは送信元 SGT および宛先エンティティのセキュリティグループ番号（宛先 SG、または DGT）を使用して、SGACL ポリシーマトリクスから適用するアクセスポリシーを決定します。

Cisco TrustSec ドメインでは、次の図のように SGT の割り当てと SGACL の適用が実行されます。

図 3: Cisco TrustSec ドメインの SGT と SGACL



1. ホスト PC は Web サーバーにパケットを送信します。PC と Web サーバーは Cisco TrustSec ドメインのメンバではありませんが、パケットのデータパスには Cisco TrustSec ドメインが含まれています。
2. Cisco TrustSec の入力デバイスは、ホスト PC の認証サーバーにより割り当てられたセキュリティグループ番号である、セキュリティグループ番号 3 の SGT を追加するようにパケットを変更します。
3. Cisco TrustSec の出力デバイスは、Web サーバーの認証サーバーによって割り当てられたセキュリティグループ番号である、送信元グループ 3 と接続先グループ 4 に適用する SGACL ポリシーを適用します。
4. SGACL がパケットを転送するように許可している場合は、Cisco TrustSec 出力スイッチは SGT を削除するようにパケットを変更し、Web サーバーにパケットを転送します。

送信元セキュリティグループの判断

Cisco TrustSec ドメインの入口のネットワークデバイスは、Cisco TrustSec ドメインにパケットを転送する際に、パケットに SGT をタグ付けできるように、Cisco TrustSec ドメインに入るパケットの SGT を判断する必要があります。出力のネットワークデバイスは、SGACL を適用するために、パケットの SGT を判断する必要があります。

ネットワーク デバイスは、次のいずれかの方法でパケットの SGT を判断できます。

- ポリシー取得時に送信元の SGT を取得する：Cisco TrustSec 認証フェーズ後、ネットワーク デバイスは、ピア デバイスが信頼できるかどうかを示すポリシー情報を、認証サーバーから取得します。ピア デバイスが信頼できない場合、認証サーバーはそのピア デバイスから着信するすべてのパケットに適用する SGT も提供します。
- パケットの送信元 SGT を取得する：パケットが信頼できるピア デバイスから送信される場合、パケットは、SGT を伝送します。これは、そのパケットにとって、そのネットワーク デバイスが Cisco TrustSec ドメイン内の最初のネットワーク デバイスではない場合に適用されます。
- 送信元アイデンティティに基づいて送信元 SGT を検索する：アイデンティティ ポート マッピング (IPM) を使用すると、接続されているピアアイデンティティのリンクを手動で設定できます。ネットワーク デバイスは、SGT および信頼状態を含むポリシー情報を認証サーバーに要求します。
- 送信元 IP アドレスに基づいて送信元 SGT を検索する：場合によっては、送信元 IP アドレスに基づいてパケットの SGT を判断するようにパケットを手動で設定できます。SGT Exchange Protocol (SXP) も、IP-address-to-SGT マッピングテーブルに値を格納できます。

宛先セキュリティグループの判断

Cisco TrustSec ドメインの出力のネットワーク デバイスは、SGACL を適用する宛先グループ (DGT) を決定します。ネットワーク デバイスは、パケットの送信元セキュリティグループを決定するために使用されるのと同じ方法 (パケットのタグからのグループ番号の取得を除く) を使用して宛先セキュリティグループを決定します。宛先セキュリティグループ番号はパケットのタグに含まれません。

場合によっては、入口のデバイスまたは出口以外のその他のデバイスが、使用できる宛先グループの情報を持っていることもあります。このような場合、SGACL は出力デバイスではなくこれらのデバイスに適用されます。

ルーテッドおよびスイッチド トラフィックでの SGACL の強制

SGACL の強制は IP トラフィックだけに適用されますが、強制はルーティングまたはスイッチングされるトラフィックに適用できます。

ルーテッドトラフィックの場合、SGACL の適用は、宛先ホストに接続されたルーテッドポートを持つ出力スイッチ (通常はディストリビューションスイッチまたはアクセススイッチ) によって実行されます。SGACL の適用をグローバルに有効にすると、SVI インターフェイスを除くすべてのレイヤ 3 インターフェイスで適用が自動的に有効になります。

スイッチングされるトラフィックの場合は、SGACL の強制はルーティング機能のない単一スイッチング ドメイン内のトラフィックフローで実行されます。2 台の直接接続されたサーバー間のサーバー間トラフィックのデータセンター アクセス スイッチ上で実行された SGACL の強制が、その例です。この例では、通常、サーバー間のトラフィックはスイッチングされません。SGACL の強制は、VLAN 内でスイッチングされるパケットまたは VLAN に関連付けられ

た SVI に転送されるパケットに適用できます。ただし実行は VLAN ごとに明示的にイネーブルにする必要があります。

SGACL ロギングと ACE 統計情報

SGACL でロギングが有効になっている場合、デバイスは次の情報を記録します。

- 送信元セキュリティグループタグ (SGT) および宛先 SGT
- SGACL ポリシー名
- パケットプロトコルタイプ
- パケットで実行されるアクション

ログオプションは個々の ACE に適用され、ACE に一致するパケットがログに記録されます。log キーワードで記録された最初のパケットは、syslog メッセージを生成します。後続のログメッセージは 5 分間隔で生成および報告されます。ロギング対応 ACE が別のパケット (ログメッセージを生成したパケットと同一の特性を持つ) と一致する場合、一致したパケットの数が増加 (カウンタ) し、レポートされます。

ロギングを有効にするには、SGACL 構成の ACE 定義の前に **log** キーワードを使用します。たとえば、**permit ip log** のようになります。

次に、送信元と宛先の SGT、ACE の一致 (許可または拒否アクション)、およびプロトコル、つまり TCP、UDP、IGMP、および ICMP 情報を表示するサンプルログを示します。

```
*Jun 2 08:58:06.489: %C4K_IOSINTF-6-SGACLHIT: list deny_udp_src_port_log-30 Denied
udp 24.0.0.23(100) -> 28.0.0.91(100), SGT8 DGT 12
```

show cts role-based counters コマンドを使用して表示できる既存の「セルごとの」SGACL 統計情報に加えて、**show ip access-list sgacl_name** コマンドを使用して ACE 統計情報も表示できます。これについて追加設定は必要ありません。

次に、**show ip access-list** コマンドを使用して ACE カウントを表示する例を示します。

```
Device# show ip access-control deny_udp_src_port_log-30

Role-based IP access list deny_udp_src_port_log-30 (downloaded)
10 deny udp src eq 100 log (283 matches)
20 permit ip log (50 matches)
```



- (注) 着信トラフィックがセルに一致するが、セルの SGACL に一致しない場合、トラフィックは許可され、セルの HW-許可のカウンタが増加します。

次に、セルの SGACL の動作例を示します。

SGACL ポリシーは「deny icmp echo」で 5～18 に設定され、TCP ヘッダーで 5～18 の着信トラフィックがあります。セルが 5～18 に一致するが、トラフィックが icmp と一致しない場合、トラフィックは許可され、セル 5～18 の HW-許可カウンタが増加します。

```
Device# show cts role-based permissions from 5 to 18
```

```
IPv4 Role-based permissions from group 5:sgt_5_Contractors to group
18:sgt_18_data_user2:sgacl_5_18-01
RBACL Monitor All for Dynamic Policies : FALSE
RBACL Monitor All for Configured Policies : FALSE
```

```
Device# show ip access-lists sgACL_5_18-01
```

```
Role-based IP access list sgACL_5_18-01 (downloaded)
10 deny icmp echo log (1 match)
```

```
Device# show cts role-based counters from 5 to 18
```

```
Role-based IPv4 counters
From To SW-Denied HW-Denied SW-Permitt HW-Permitt SW-Monitor HW-Monitor
5 18 0 0 0 1673202 0 0
```

VRF 対応 SGACL ロギング

SGACL システムログには VRF 情報が含まれます。現在ログに記録されているフィールドに加えて、ロギング情報には VRF 名が含まれます。更新されたロギング情報は次のようになります。

```
*Nov 15 02:18:52.187: %RBM-6-SGACLHIT_V6: ingress_interface='GigabitEthernet1/0/15'
sgacl_name='IPV6_TCP_DENY' action='Deny' protocol='tcp' src-vrf='CTS-VRF' src-ip='25::2'
src-port='20'
dest-vrf='CTS-VRF' dest-ip='49::2' dest-port='30' sgt='200' dgt='500'
logging_interval_hits='1'
```

SGACL モニター モード

Cisco TrustSec の事前導入段階で、管理者は、モニターモードを使用して、ポリシーが意図したとおりに機能することを確認するために、セキュリティポリシーを適用しない状態でテストします。セキュリティポリシーが意図したとおりに機能しない場合には、モニターモードが、その問題を識別するための便利なメカニズムと、SGACL の適用を有効にする前にポリシーを修正する機会を提供します。これにより、管理者は、ポリシーを適用する前にポリシーアクションの結果をより可視的に確認でき、対象のポリシーがセキュリティ要件を満たしている（ユーザーが認証されなければリソースへのアクセスは拒否される）ことを確認できます。

モニタリング機能は、SGT-DGT ペア レベルで提供されます。SGACL モニター モード機能を有効にすると、拒否アクションがラインカード上の ACL 許可として実装されます。これにより、SGACL カウンタおよびロギングでは、接続が SGACL ポリシーによりどう処理されてい

るかを表示できます。すべてのモニター対象トラフィックが許可されるため、SGACL モニターモードでは、SGACL によるサービスの中断はありません。

許可とポリシーの取得

デバイス認証が終了すると、サブリカントとオーセンティケータの両方が認証サーバーからセキュリティ ポリシーを取得します。2つのピアは、リンク認可を実行し、Cisco TrustSec デバイス ID に基づいてリンクセキュリティ ポリシーを相互に適用します。リンクの認証方式は、802.1X または手動認証に設定できます。リンクのセキュリティが 802.1X である場合、各ピアは認証サーバーから受信したデバイス ID を使用します。リンクのセキュリティが手動の場合、ピア デバイス ID を割り当てる必要があります。

認証サーバーは次の属性を返します。

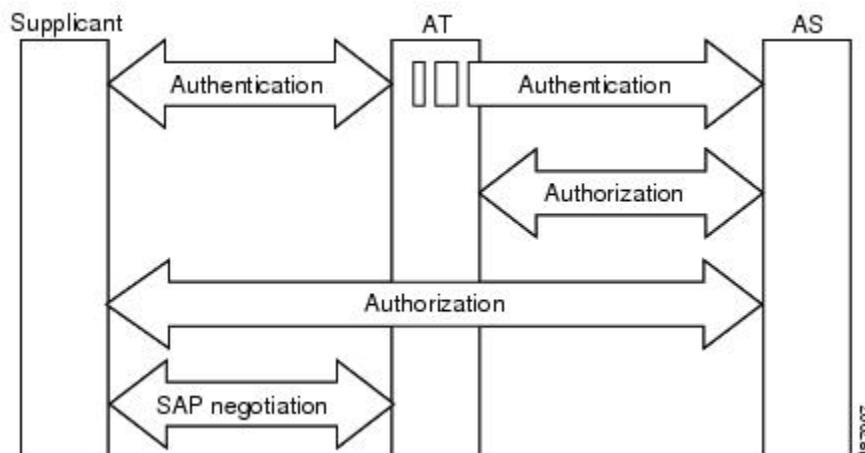
- Cisco TrustSec の信頼状態：パケットに SGT を付けるにあたり、ピア デバイスが信用できるかどうかを示します。
- ピア SGT：ピアが属しているセキュリティ グループを示します。ピアが信頼できない場合は、ピアから受信したすべてのパケットにこの SGT がタグ付けされます。SGACL がピアの SGT に関連付けられているかどうかデバイスが認識できない場合、デバイスは認証サーバーに追加要求を送信して SGACL をダウンロードする場合があります。
- 許可期限：ポリシーの期限が切れるまでの秒数を示します。Cisco TrustSec デバイスはポリシーと許可を期限が切れる前にリフレッシュする必要があります。デバイスはデータの有効期限が切れていなければ認証およびポリシーデータをキャッシュし、リブート後に再利用できます。



- (注) Cisco TrustSec デバイスは、認証サーバーからピアの適切なポリシーを取得できない場合に備えて、最小限のデフォルト アクセス ポリシーをサポートする必要があります。

次の図に、NDAC および SAP ネゴシエーションプロセスを示します。

図 4: NDAC および SAP ネゴシエーション



環境データのダウンロード

Cisco TrustSec 環境データは、Cisco TrustSec ノードとしてのデバイスの機能を支援するひとまとまりの情報またはポリシーです。デバイスは、Cisco TrustSec ドメインに最初に加入する際に、認証サーバーから環境データを取得しますが、一部のデータをデバイスに手動で設定することもできます。たとえば、Cisco TrustSec のシードデバイスには認証サーバーの情報を設定する必要がありますが、この情報は、デバイスが認証サーバーから取得するサーバーリストを使用して、後から追加することができます。

デバイスは、期限前に Cisco TrustSec 環境データをリフレッシュする必要があります。また、このデータの有効期限が切れていなければ、環境データをキャッシュし、リブート後に再利用することもできます。

デバイスは RADIUS を使用して、認証サーバーから次の環境データを取得します。

- サーバーリスト：クライアントがその後の RADIUS 要求に使用できるサーバーのリスト（認証および許可の両方）PAC のリフレッシュは、これらのサーバーを介して行われます。
- デバイス SG：そのデバイス自体が属しているセキュリティグループ
- 有効期間：Cisco TrustSec デバイスが環境データをリフレッシュする頻度を左右する期間

RADIUS リレー機能

802.1X 認証プロセスで Cisco TrustSec オーセンティケータのロールを引き受けるデバイスは、認証サーバーへの IP 接続を通じて、UDP/IP での RADIUS メッセージの交換により、デバイスが認証サーバーからポリシーと許可を取得できるようにします。サブリカントデバイスは認証サーバーとの IP 接続がなくてもかまいません。サブリカントに認証サーバーとの IP 接続がな

い場合、Cisco TrustSec はオーセンティケータをサブリカントの RADIUS リレーとして機能させることができます。

サブリカントは、RADIUS サーバーの IP アドレスと UDP ポートを持つオーセンティケータに特別な EAPOL メッセージを送信し、RADIUS 要求を完了します。オーセンティケータは、受信した EAPOL メッセージから RADIUS 要求を抽出し、これを UDP/IP を通じて認証サーバーに送信します。認証サーバーから RADIUS 応答が返ると、オーセンティケータはメッセージを EAPOL フレームにカプセル化して、サブリカントに転送します。

リンク セキュリティ

リンクの両側で 802.1AE Media Access Control Security (MACsec) をサポートしている場合、セキュリティ アソシエーション プロトコル (SAP) ネゴシエーションが実行されます。サブリカントとオーセンティケータの間で EAPOL-Key が交換され、暗号スイートのネゴシエーション、セキュリティ パラメータの交換、およびキーの管理が実行されます。これら 3 つの作業が正常に完了すると、セキュリティ アソシエーション (SA) が確立します。

ソフトウェア バージョン、暗号ライセンス、およびリンク ハードウェア サポートに応じて、SAP ネゴシエーションは次の動作モードの 1 つを使用できます。

- Galois/Counter Mode (GCM) : 認証および暗号化ありを指定します
- GCM 認証 (GMAC) : 認証あり、暗号化なしを指定します
- カプセル化なし : カプセル化なし (クリア テキスト) を指定します
- ヌル : カプセル化あり、認証なし、暗号化なしを指定します

カプセル化なしを除くすべてのモードで、Cisco TrustSec 対応のハードウェアが必要です。

リンクセキュリティ用の SAP-PMK の設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

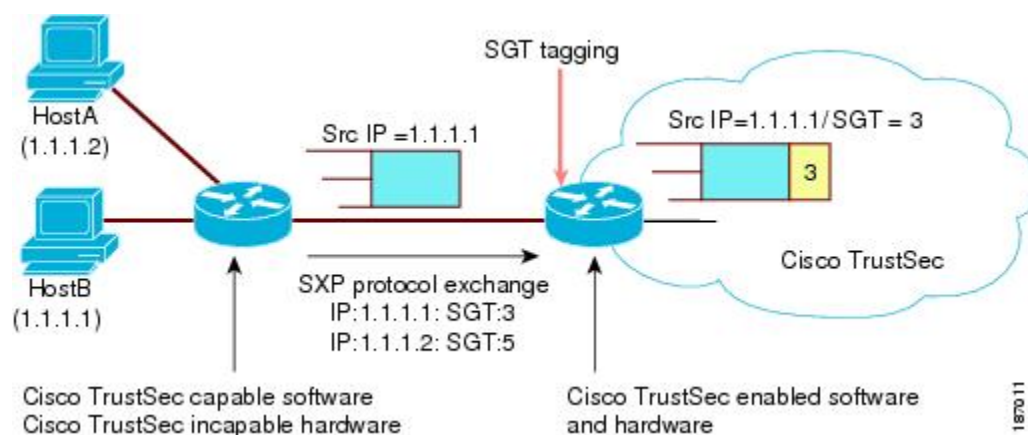
	コマンドまたはアクション	目的
		(注) インターフェイスでデータリンク暗号化を使用できない場合は、デフォルトおよび唯一使用可能な SAP 動作モードは no-encap コマンドです。SGT はサポートされません。
ステップ 8	end 例 : Device(config-if-cts-manual)# end	Cisco TrustSec 手動コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SXP によるレガシー アクセス ネットワークへの SGT の伝播

パケットへの SGT のタグ付けには、ハードウェアによるサポートが必要です。Cisco TrustSec 認証に参加する機能があっても、パケットに SGT をタグ付けするハードウェア機能がないデバイスがネットワークにある場合があります。SGT 交換プロトコル (SXP) を使用して、これらのデバイスは、Cisco TrustSec 対応のハードウェアを搭載している Cisco TrustSec ピア デバイスに IP アドレスと SGT のマッピングを渡すことができます。

通常、SXP は Cisco TrustSec ドメイン エッジの入力アクセス レイヤ デバイスと Cisco TrustSec ドメイン内のディストリビューション レイヤ デバイス間で動作します。アクセス レイヤ デバイスは入力パケットの適切な SGT を判断するために、外部送信元デバイスの Cisco TrustSec 認証を実行します。アクセス レイヤ デバイスは IP デバイス トラッキング および (任意で) DHCP スヌーピングを使用して送信元デバイスの IP アドレスを学習し、その後 SXP を使用して送信元デバイスの IP アドレス および SGT を、ディストリビューション デバイスに渡します。Cisco TrustSec 対応のハードウェアを備えたディストリビューション デバイスはこの IP と SGT のマッピング情報を使用してパケットに適切にタグを付け、SGACL ポリシーを適用します。

図 5: SXP プロトコルによる SGT 情報の伝播



Cisco TrustSec ハードウェア サポート対象外のピアと Cisco TrustSec ハードウェア サポート対象のピア間の SXP 接続は、手動で設定する必要があります。SXP 接続を設定する場合は、次の作業を実行する必要があります。

- SXP データの整合性と認証が必要になる場合は、ピアデバイスの両方に同じ SXP パスワードを設定する必要があります。SXP パスワードは各ピア接続に対して明示的に指定することも、デバイスに対してグローバルに設定することもできます。SXP パスワードは必須ではありませんが、使用することを推奨します。
- 各ピアを SXP 接続に SXP スピーカーまたは SXP リスナーとして設定する必要があります。スピーカー デバイスはリスナー デバイスに IP-to-SGT 情報を渡します。
- 送信元 IP アドレスを指定して各ピアの関係付けに使用したり、特定の送信元 IP アドレスを設定していないピア接続に対してデフォルトの送信元 IP アドレスを設定したりすることができます。送信元 IP アドレスを指定しない場合、デバイスはピアへの接続のインターフェイスの IP アドレスを使用します。

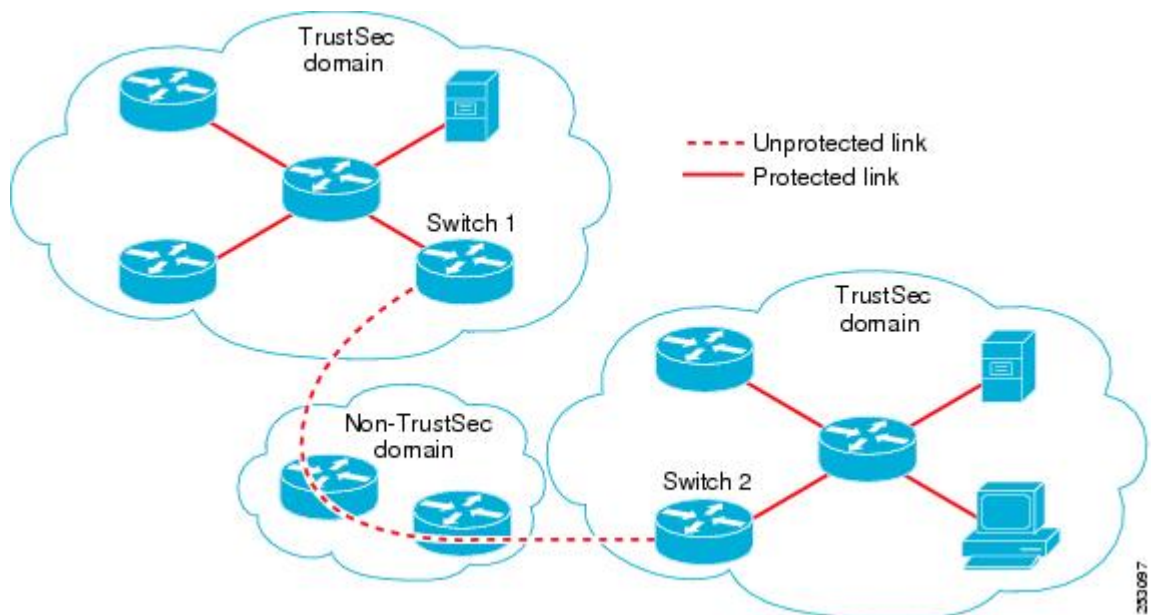
SXP は複数のホップを許可します。つまり、Cisco TrustSec ハードウェア サポート対象外デバイスのピアが Cisco TrustSec ハードウェア サポートの対象外でもある場合、2 番目のピアはハードウェア対応ピアに到達するまで IP と SGT のマッピング情報の伝播を継続して、3 番目のピアへの SXP 接続を設定できます。デバイスは 1 つの SXP 接続では SXP リスナーとして、別の SXP 接続では SXP スピーカーとして設定できます。

Cisco TrustSec デバイスは TCP キープアライブ メカニズムを使用して、SXP ピアとの接続を維持します。ピア接続を確立または回復するために、デバイスは設定可能な再試行期間を使用して接続が成功するか、接続が設定から削除されるまで接続の確立を繰り返し試行します。

非 TrustSec 領域のスパニングのためのレイヤ 3 SGT トランスポート

パケットが非 TrustSec を宛先として Cisco TrustSec ドメインを離れると、出力 Cisco TrustSec デバイスは外部ネットワークにパケットを転送する前に Cisco TrustSec ヘッダーおよび SGT を削除します。ただし、次の図に示すように、パケットが別の Cisco TrustSec ドメインへのパス上にある非 TrustSec ドメインを通過するだけの場合、Cisco TrustSec レイヤ 3 SGT トランスポート機能を使用して SGT を維持できます。この機能では、出力 Cisco TrustSec デバイスは、SGT のコピーを含む ESP ヘッダーを使用してパケットをカプセル化します。カプセル化されたパケットが次の Cisco TrustSec ドメインに到達すると、入力 Cisco TrustSec デバイスは ESP カプセル化を解除して、SGT のパケットを伝播します。

図 6: 非 TrustSec ドメインのスパニング



Cisco TrustSec レイヤ 3 SGT トランスポートをサポートするために、Cisco TrustSec 入力または出力レイヤ 3 ゲートウェイとして機能するすべてのデバイスは、リモート Cisco TrustSec ドメインの適格なサブネットと、それらの領域内の除外されたサブネットを一覧表示するトラフィック ポリシー データベースを維持する必要があります。Cisco Secure ACS から自動的にダウンロードできない場合、デバイスごとにこのデータベースを手動で設定できます。

デバイスは 1 つのポートからレイヤ 3 SGT トランスポートデータを送信し、別のポートでレイヤ 3 SGT トランスポートデータを受信できますが、入力および出力ポートの両方が Cisco TrustSec 対応のハードウェアであることが必要です。



- (注) Cisco TrustSec はレイヤ 3 SGT トランスポートのカプセル化パケットを暗号化しません。非 TrustSec ドメインを通過するパケットを保護するために、IPsec などの他の保護方式を設定できます。

VRF-Aware SXP

仮想ルーティングおよびフォワーディング (VRF) の SXP の実装は、特定の VRF と SXP 接続をバインドします。Cisco TrustSec を有効にする前に、ネットワーク トポロジがレイヤ 2 またはレイヤ 3 の VPN に対して正しく設定されており、すべての VRF が設定されていることを前提としています。

SXP VRF サポートは、次のようにまとめることができます。

- 1 つの VRF には 1 つの SXP 接続のみをバインドできます。
- 別の VRF が重複する SXP ピアまたは送信元 IP アドレス持つ可能性があります。
- 1 つの VRF で学習 (追加または削除) された IP-SGT マッピングは、同じ VRF ドメインでのみ更新できます。SXP 接続は異なる VRF にバインドされたマッピングを更新できません。SXP 接続が VRF で終了しない場合は、その VRF の IP-SGT マッピングは SXP によって更新されません。
- VRF ごとに複数のアドレス ファミリがサポートされています。そのため、VRF ドメインの 1 つの SXP 接続が IPv4 および IPv6 両方の IP-SGT マッピングを転送できます。
- SXP には VRF あたりの接続数および IP-SGT マッピング数の制限はありません。

レイヤ 2 VRF-Aware SXP および VRF の割り当て

VRF からレイヤ 2 VLAN への割り当ては、`cts role-based l2-vrf vrf-name vlan-list` グローバル コンフィギュレーション コマンドで指定されます。VLAN は VLAN 上に IP アドレスが設定されたスイッチ仮想インターフェイス (SVI) がない限り、レイヤ 2 VLAN と見なされます。VLAN の SVI に IP アドレスが設定されると、VLAN はレイヤ 3 VLAN になります。

`cts role-based l2-vrf` コマンドで設定された VRF 割り当ては、VLAN がレイヤ 2 VLAN として維持されている間はアクティブです。VRF の割り当てがアクティブな間に、学習した IP-SGT バインディングも VRF と IP プロトコルバージョンに関連付けられた転送情報ベース (FIB) テーブルに追加されます。VLAN の SVI がアクティブになると、VRF から VLAN への割り当てが非アクティブになり、VLAN で学習されたすべてのバインドが SVI の VRF に関連付けられた FIB テーブルに移動されます。

VRF から VLAN への割り当ては、割り当てが非アクティブになっても保持されます。SVI が削除された、または SVI の IP アドレスの設定が解除された場合に再アクティブ化されます。再アクティブ化された場合、IP-SGT バインドは、SVI の FIB に関連付けられた FIB テーブル

から、**cts role-based l2-vrf** コマンドによって割り当てられた VRF に関連付けられた FIB テーブルに戻されます。

Cisco TrustSec の機能履歴の概要

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	Cisco TrustSec Overview	Cisco TrustSec は、信頼できるネットワーク デバイスのドメインを確立することによってセキュア ネットワークを構築します。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> [英語] からアクセスします。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。